

日時: 令和 7 年 12 月 10 日 (水) 9:10~10:25

グループ討議発表

幼児・児童の交通安全 1 グループ/対面

現状の課題・問題点	課題・問題への対策案	対策案を実施する上での問題点
<p>小学校の事故事例が多いものについて 飛び出しが多い 飛び出しのイメージを持たせる</p> <p>習慣化させるにはどうする</p> <p>集中力がなくなる</p>	<p>幼児のうちにおしえないといけないこと 小学生の事故を減らす</p> <p>止まる・見る・聞く・待つをやる 聞くこと大切 (音クイズ) 悪い例する バベット・実演・パワーポイントでキャラクタ使用など</p> <p>小さいときは、繰り返しが必要 すりこみする</p> <p>からだを使う (体操) 短い間隔で課題を変えていく</p> <p>視覚にうったえるものが良い (動画・手作りパネルなど使用) 騒ぎ出す 動きすぎると騒いでしまう</p>	<p>小学校の保育園教室は毎年できない地域あり (小学校では自転車教室がメイン、人員不足など)</p> <p>定点カメラの実験 一交通安全教室 1 回をやって子 二毎日先生が 1 分間注意した場合 二の方が効果がある 日常の繰り返しが大事 園や小学校、親が交通安全の意識をどう持ってもらうか。</p>

幼児・児童の交通安全 2 グループ/対面

現状の課題・問題点	課題・問題への対策案	対策案を実施する上での問題点
<p>・路側帯からはみ出て歩く小学生がいること ・車道側に近いところを歩かざるを得ない道路環境が多い※歩道がない、雑草等が生えている等ため &lt;補足&gt; 登校中より下校中の方が子どもの重症・死者が多い＝登校時間はある程度同じ時間帯で、大人の目もあり指導もできるが、下校時間はそれができないことが多い。子どもが主体的に考えて子どもたちだけでも正しい行動が出来るようにしなければいけない① ・安全教室で答えられ、行動できたとしても、日常では実践できていないことが多い &lt;補足&gt; 年に 1 回の交通安全教室では少ない &lt;補足&gt; 生真面目にルールを守ろうとしても、浮いた存在になることがあるため、結果的に守らない方向になってしまう②</p>	<p>・子どもたちに日常的に一列で歩くように指導する ・道路で守るべきことを日常的に繰り返し指導する ・安全マップを先生と協力して作り、子どもに周知できるようにする ・行政に改善するように呼びかける ・人感センサーで対応する ・立て看板を設置する① ・大人がしっかりできている子どもたちをほめ、正しい事だと伝える ・日常的に繰り返し伝える ・先生・高学年からの協力を得て定期的に伝えるようにする ・事故の多くなる 10～12 月に合わせて安全教室を行う ・春の安全教室と秋には別の交通安全に関する教室 (4～5 年向け) ふうなものも行うようにする ・夏休みの宿題 (ポスター) とか、日常の宿題などに交通安全を組み込む※学校に任せるではなく外郭団体が関わって学校の負担を少なくする ・保護者に子どもがどのような登下校をしているかを伝える必要がある ・大人 (保護者) に向けた安全教室を行う②</p>	<p>・予算・行事・人員の問題があり、安全教室を年 2 回もできない ・学校との連携の問題がある。行事もためた、年に 2 回行えない ・保護者に伝えるすべがない →連絡メールを活用する →PTA を活用する※総会等 →SNS を活用する※データを投稿する →回覧板の中に交通安全のチラシを入れる →宿題としてたして、親子で考えて交通安全に取り組んでもらう →イベントやグループに介入して交通安全について伝える機会を用意する②</p> <p>&lt;まとめ&gt; 「子どもの交通安全への意識を高めるには」 幼児 2 のグループであがった現状の問題点は、指導が行き届かない・継続しないという点です。安全教室や指導員さんがいるときには、ルールが守られていても、子どもだけになった時にルールは知っていても守れないという現状があります。それに対する対策案としては、保護者の交通安全への意識の向上が必要だと考えました。 ですが、保護者に対して伝える術がない問題点があることに気づきました。その問題点の解決策として、「交通安全に関する宿題を出す」ということです。具体的には、子どもだけでは分からないような内容も織り交ぜ、保護者に聞いて考える機会を宿題の中で考える、夏休みの宿題としてだす、タブレットを使ってもらい、保護者と危ない箇所の写真を撮ってきてもらうなどで、保護者からのコメント欄を付けるなどして子どもと保護者で交通安全について会話できるようになると良いと考えました。</p>

## 自転車の交通安全 1 グループ/対面

現状の課題・問題点	課題・問題への対策案	対策案を実施する上での問題点
<p><b>課題 自転車ヘルメット着用をどの様に推進していくか？</b></p> <p><b>問題点</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生（特に女子）着用推進が進んでいない</li> <li>・大人への着用推進をどうするか（子供はヘルメットをかぶっているのに、保護者がかぶっていない例が散見される。）</li> <li>・ヘルメットの着用が努力義務である現状で強く指導できない現状がある。</li> <li>・子供は自転車交通安全教室などの教育機会があるが大人の教育機会が少ない。</li> <li>・自転車事故の怖さが正しく伝わっていない（バイクであれば怖いからヘルメットをかぶる）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大人の教育機会を確保するため、既の実施している学校での交通安全教室に保護者を積極的に参加してもらう方法をとる。</li> <li>・スクエアドストレート手法を使用して自転車事故の怖さを正しく認識してもらう</li> <li>・自転車ヘルメットを適正に保管するためにヘルメットホルダーを配布する</li> <li>・会社、事業所などに対する交通安全教育を推進し、大人に対する教育機会を確保する。</li> <li>・現状、道路交通法上、ヘルメット着用は努力義務であるが、校則や規則などの他の規則でヘルメット着用を義務化する。</li> <li>・駐輪場でヘルメット着用者割引を実施する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者間の人間関係が希薄となる中で交通安全教育に保護者が参加してくれるのか課題があり、学校等、教育関係機関との調整が必要。</li> <li>・各自治体で主に中学校を対象にスクエアドストレートを実施している。予算措置が必要。中学校から高校等に対象を拡大するとすれば各団体との調整が必要。</li> <li>・予算措置が必要。どの年代に配布するか検討が必要。</li> <li>・交通安全指導者にも大人に教育を実施するスキルが必要。学生に対するティーチングは得意だが、成人に対するコーチングは不得意</li> <li>・校則、規則で義務化しても校門等の監督者の目の届かないところではヘルメットをかぶらない等、根本的な解決にはならない。</li> <li>・予算措置が必要。（八王子市で実施中）</li> </ul>

## 高齢者の交通安全 1 グループ/対面

現状の課題・問題点	課題・問題への対策案	対策案を実施する上での問題点
<p><b>課題 1 横断歩道外横断中の割合が最も多い（若者に比べ、道路を渡る時の交通事故が多い。）</b></p> <p>★認知機能や身体機能の低下によって起こりやすく、根底には横断歩道外を渡ると近道できるという考えがある。</p> <p><b>課題 2 75 歳以上の高齢運転者による交通死亡事故が多い。</b></p> <p>★、認知機能や身体機能（ハンドル操作とアクセルブレーキの誤り）の変化に加え、交通事故の起こりやすい天候（雨）や夜間での運転が合わさっている。</p>	<p><b>課題 1</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 身体機能検査（反射棒などの体験型）を実施し、自身の能力を知ってもらう。</li> <li>2. 交通危険箇所や地元の事故事例を把握するための地図を一緒に作成し、安全な歩き方を自分ごととして一緒に考えていく。</li> <li>3. 横断歩道がない道路も多いため、明るい服装と反射材の着用を勧める。反射材は、有効な部位につけることを教え、光り方も見てもらい、納得してつけてもらう。</li> </ol> <p><b>課題 2</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 高齢運転者へ行政等のサポート等、免許返納制度を説明し、免許返納を促す。</li> <li>2. 雨の日や夜間は運転しないなどを決める、マイルール運転を実行してもらう。</li> </ol>	<p><b>課題 1</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・体験型学習を恥ずかしがる。</li> <li>・“高齢者向け”とすると、なかなか集まってくれない。</li> <li>・コミュニティができていない高齢者は集まってくれないが、コミュニティに参加していない高齢者には周知が行き届かない。</li> </ul> <p><b>課題 2</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. h・免許返納時期の判断が難しい。</li> <li>・返納制度が充実していない場合、勧めることができない。</li> <li>2. ・マイルール運転の周知や実効性の担保など</li> </ol>

## 幼児・児童の交通安全 A グループ/オンライン

現状の課題・問題点	課題・問題への対策案	対策案を実施する上での問題点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・飛び出しが多い</li> <li>次から次に興味が出てくる。集中力が長く持たない。こどもたちの興味を引くものについて。</li> <li>・4 - 6月に事故が多いのは入学したてで道に慣れていない。こどもだけで歩くことに慣れていない。</li> <li>入学前の3月に外での歩行練習をしているがそれだけでは足りない。園だけでなく各家庭でも協力してもらい指導をほしい。</li> <li>・教室終了後に啓発品を渡すだけではつけて終わりなので、家庭でも教えることができるようにチラシなど教材もあるとよい。</li> <li>・手をあげれば車は止まってくれるだろうと思っている。手をあげるだけでなく車が止まるまで待ってから歩くように練習させる必要がある。</li> <li>・繰り返し練習をして安全に渡ることができるようにさせる。</li> <li>・登下校中の事故が多いことについて：車の運転手も「ここは通学路だ」ということがわかっているだろうからこどもだけでなく、運転手側のルールの周知の必要性</li> <li>・「車が絶対に止まってくれるわけではない」ということも教える必要がある。</li> </ul>	<p><b>【集中力が切れてしまう】</b></p> <p>→<u>飽きさせない工夫</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・同じことと伝えるとしても手法を変える。</li> <li>例：パネルを使ったり、手品をしたり飽きさせない工夫（視覚的工夫）。</li> <li>・紙芝居など字だけでなく絵でも理解を深めてもらう。</li> <li>・こどもたちが興味をもつキャラクターやぬいぐるみなどの活用</li> <li>・クイズなどこどもたち参加型で興味を惹く。</li> <li>・DVDなど視覚教材の活用→集中してくれる</li> </ul> <p><b>【家庭でのサポート】</b></p> <p>→<u>保護者の交通安全意識の向上</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>例：家庭で外出をした際にもルールを取り入れてもらい意識を高めてもらう。</li> <li>・チラシや啓発物の配布→活用してもらう</li> <li>・保護者への周知について：チラシや啓発品だけでなく各施設のアプリなどでの周知（経費がかからない）</li> <li>・大人がお手本となりこどもに見せる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・参観日等の活用はいいが、日程調整など難しい点がある。参観日でも参加が難しい方もいる。（意識してほしい、来てほしい層に届かない）</li> <li>・教える側と学校、保護者との温度差</li> <li>・手作りの教材について：時間を要する</li> <li>・啓発品、チラシについて：予算との兼ね合い</li> <li>・市街地では地域の交番から来てくれるが、中心部では人員が不足していて十分な教室が実施できない。</li> <li>・警察だけでなく指導員や見守り隊の高齢化に伴う人員の不足</li> <li>・DVD等を見せるときの機材（機材がない施設は持参する必要がある）</li> </ul> <p>→<u>モノ（機材・教材）・ヒト（人員の確保・気持ち）・カネ（予算）・時間</u></p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・こどもの交通安全教室に親子で参加してもらってルールを再確認してもらう。（学校との連携、参観日などの活用）</li> <li>・市のイベント（お祭りなど）で交通安全のブースを立ち上げて保護者とこどものセットでできてもらい周知している</li> </ul> <p><b>【運転手・大人側のマナーについて】</b></p> <p>→<u>運転手等への周知の強化</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・交通安全運動などを活用してのほり旗や駅などでの啓発品配布等での周知。</li> <li>・交通安全団体にも協力してもらう。</li> <li>・こどもから保護者（大人）へ教えてね、と伝える。</li> <li>・危険な運転をしている車を見つけたときは警察に連絡→パトロールの強化。（警察との協力）</li> <li>・広報誌に交通安全の記事を載せる。</li> <li>・ネットでの交通安全について記載→周知（園など団体で自由に活用してOK）</li> <li>・自動車学校でのイベントで交通ルールについて周知する</li> </ul>	

## 幼児・児童の交通安全 B グループ/オンライン

現状の課題・問題点	課題・問題への対策案	対策案を実施する上での問題点
<p>1. 子どもたちの集中力の低下と教室内容のマンネリ化</p> <p>2. 右左の認識について</p> <p>3. 子どもたちが興味を引く内容はどのようにしたらよいか</p>	<p>1. ・子どもが自ら考える参加型の〇×クイズを行い、正解と間違いをわかりやすく伝える。 ・指導員がキャラクターになり、鬼やキジになったりの寸劇を行う。(桃太郎の場合) ・DVD視聴後に体をみんなで動かしてリフレッシュを促し切り替えの時間を作る。</p> <p>2. ・バッジを子どもの右肩に取り付けて、右がどちらかをわかりやすく伝える。 ・右手左手が歌詞に出てくるアブラハムの子体操などを活用している。 ・パネルを使用して右左を視覚的に伝える。 ・左右について「名札が付いているほうだよ」「心臓ドキドキしているほうだよ」と分かりやすい例を提示して伝える。 ・先生にポーズをとってもらって子供たちに真似をしてもらうゲーム感覚で・・</p> <p>3. ・冬の教室時ランドセルを譲ってもらう機会を得て未就学児に対して実際にランドセルを装着して交通教室を行う。 ・傘の使い方の教室を行う(正しい持ち方を付</p>	<p>1. ・教室内容がマンネリ化しないように、様々な教材や DVD を試してみたいが、予算の都合上難しい。交通安全に関する教材は高価なため、万が一教材選びに失敗してしまった場合にリスクがある。結果、独自で教材を作る対応をとっている自治体もある。</p> <p>2. 右がどちらか、左がどちらか、というところに意識が向いてしまい、車両が向かってくることやそのほかの障害物の認識が疎かになってしまう可能性がある。</p> <p>3. ランドセルは高価で個々の思い入れがあるため、集めるのが難しい。また、ランドセルや傘などのアイテムがあることで、そちらに意識が向いてしまい、逆に集中しづらい場合が考えられる。</p>

<p>4. 簡潔に子どもたちに伝えるにはどうしたらよいか</p> <p>5. 保護者への交通安全のアプローチ方法について</p> <p>6. 交通安全教室の熱中症対策はどうしたらよいか</p>	<p>劇などを通じて説明する)</p> <p>4. ・単に「危ない」だけじゃなく、具体的に「道路は車が走っているから危ない」と理由や具体例をあげてわかりやすく説明する。 ・「これだけは覚えてほしい！」「今から話すことはとても大切なお話だよ」等の子どもたちの注意を引き付ける説明をする。 ・手を繋ぐときの「ニギニギ」やシートベルト装着「カッチン」等の子どもたちにもなじみのある擬音を用いて伝える。</p> <p>5. ・保護者に対する登園指導の機会を設けている。 ・桃太郎倶楽部などの県主催の研修に参加する。</p> <p>6. ・熱中症に関しては学校におまかせしているが水筒などをお願いしている。 ・指導員のお話(講和)は室内で行い、実技などは屋外で行う。 ・計画案を基にして教室より事前に水分補給の時間をこまめに入れてもらう(休憩などを適度に挟んでもらう)</p>	<p>4. 簡潔に伝え、その時覚えていたとしても、結局忘れてしまう可能性がある。まずは楽しい！と思える教室作りから、子どもたちの頭に残るキーワードを織り交ぜながら繰り返し伝えていくことが重要だと考える。</p> <p>5. 登園の時間帯が保護者によって異なる、仕事で先を急いでいる、こちらの働き方改革による早朝出勤の軽減等により、お互いに合致する時間を調整するのが難しい。</p> <p>6. ・入念に熱中症対策をしても、昨今の異常気象から体調不良につながってしまう可能性がある。教室の充実性維持しつつ、屋内での開催を推奨していくことも必要なのかもしれない。</p>
--	---	---

## 幼児・児童の交通安全 C グループ/オンライン

現状の課題・問題点	課題・問題への対策案	対策案を実施する上での問題点
<p>・車や自転車のマナーが悪く、子供たちがルールを守っていたとしても登下校の際の危険はなくならない。</p> <p>・限られた回数しか教室を開けないため、定着を図ることが難しい。自転車を持っていない子や持っていない子がいて自転車の実技指導が実施できなくなっている。</p> <p>・駐車場は非常に危険な場所だが、児童たちその意識を持たせることが難しい。</p> <p>・家庭から交通安全の教育を始めてもらいたい、なかなか保護者へ指導をする機会を設けることができない。</p> <p>啓発映像が怖い</p>	<p>・高校生や大人への交通安全啓発を児童さんへの指導を並列して行っていく。</p> <p>・園や小学校の協力も得ながら、多種多様な指導方法を考案し、回数を積み重ねて重要性を伝えていく。自転車教室は、実技で使用する自転車を主催側で用意するなど工夫を行う。乗れない子へはハンドルのみを用意し実施。</p> <p>・駐車場での指導を増やしたり、登園や帰宅時間での見守りの機会を設け、児童、保護者両方への意識定着を図る。</p> <p>・パンフレットやチラシを作り、保護者が集まる時間に啓発のお話をする時間を用意し、ともに配布も行う。読んでもらえず捨てられるかもしれないことを防ぐために、そのなかで子供と一緒に交通安全に勉強ができるめり絵などで工夫を凝らす。</p> <p>段ボールなどで親しみやすいものを作る。</p>	<p>コロナをきっかけに地域のいろいろな世代が集まる機会が減り、こういった意識の共有ができなくなっている。</p> <p>・先生方の負担が増えたり、働き方改革などで協力を仰ぐことが難しくなっている。</p> <p>・子供たちは、はしゃいでしまうと忘れてしまうため、忘れることのないお約束を作るために工夫が必要である。</p>

## 自転車の交通安全 A グループ/オンライン

現状の課題・問題点	課題・問題への対策案	対策案を実施する上での問題点
<p>尾崎：指導員には権限がない</p> <p>岡本：各団体で指導等は行っている</p> <p>平塚：ヘルメットの着用率が低い。中学生のマナーが悪い</p> <p>村田：中学生がスピードを出して危険</p> <p>星名：交通ルールを正しく把握していない</p> <p>齋藤：高校生のマナーが悪い（高校生の教室が必要）</p> <p>志村：外国籍の方、ルールを知らない方（傘差し運転など）</p> <p>平塚：欧米と日本で自転車の仕組みが異なる。ルールも日本と異なる。</p> <p>村田：教室は小学校のみで中高に実施できていない。</p> <p>【課題・問題】</p> <p>① 中学生のルール違反が目立つ</p>	<p>① 中学生のルール違反が目立つ</p> <p>尾崎：学校で指導をして欲しい</p> <p>志村：警察署と連携して対応している（中学）</p> <p>スクールサポーターに情報共有して学校から指導をしよう（高校）</p> <p>齋藤：中学校では全校実施している</p> <p>法領田：スクエアドストリート教室の実施</p> <p>星名：中学校では全校実施している。高校主体に教室を実施している（現在青切符を周知）。</p> <p>櫻井：ビデオを作成して中学生を対象に見てもらう。高校生には警察と連携して行っているが周知が難しい。</p> <p>岡本：指導カードを活用した指導。全中学校に教室を実施（実技、座学のみなど）。高校は座学がメイン。</p> <p>斎藤：ホームページに啓発（青切符制度）</p> <p>→県の教育委員会に依頼</p> <p>星名：小さいチラシを作成して学校に配布</p> <p>斎藤：メールにて周知(幼・小・中)</p> <p>【対策案】</p> <p>・中学生の交通教室を行う</p> <p>→他の団体と連携して行う。</p> <p>・高校へ指導を依頼する</p> <p>→デジタル(HP など)を活用して周知・注意喚起</p>	<p>・中学生の交通教室を行う</p> <p>尾崎：学校関係者の安全意識の差</p> <p>平塚：保護者の安全意識の差</p> <p>・高校へ指導を依頼する</p> <p>なし</p>

<p>② 外国人、交通教室が行われていない →ルール違反が目立つ ※ヘルメットの着用率が低い</p>	<p>② 外国人、交通教室が行われていない 法領田：ヘルメットの補助金、自転車安全利用五足の英語版を作成している 岡本：外国籍（ベトナム・中国・フィリピンなど）の方向けに警察官と一緒に出向き自転車のルール指導・実技を行っている（警察署での指導もあり）。 志村：日本語教室の一端で交通教室を行っている（グループ討議形式）。 平塚：5分間ほどかけて交通ルールを伝えている（外国語のチラシを作成）。 尾崎：雇用主に教えてもらう。 櫻井：転入の際に LINE などを登録してもらい SNS 上で周知をする。 聖名：自転車購入時に啓発（啓発チラシを活用）</p> <p>【対策案】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・SNS を利用して情報を発信</li> <li>・外国人と関わる方に指導をお願いする。</li> <li>→市の手続き時、自転車の販売時などでチラシ等を活用。</li> <li>・外国人を雇っている方に交通教室を呼びかける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SNS を利用して情報を発信 岡本：SNS のアカウントを所有していない。 聖名：一部の未登録の人に情報が届かない</li> <li>・外国人と関わる方に指導をお願いする。 志村：チラシなど作成の費用がかかる。対象が広範囲である。 聖名：チラシなどを渡す際に知識がないと対応できない可能性。</li> <li>・外国人を雇っている方に交通教室を呼びかける。 法領田：市や警察からのマニュアルなど雇用主側へのサポートが必要。</li> </ul>
--	---	--

## 高齢者の交通安全 A グループ/オンライン

現状の課題・問題点	課題・問題への対策案	対策案を実施する上での問題点
<p>高齢者の事故を減らしたい ・夜間の交通事故が多い ・車社会で高齢者の運転が多い。加齢による身体機能、認知機能の低下が操作ミスに繋がる ・高齢者本人に運転適性がないという自覚がない ・高齢者の特徴として、歩きなれた道だからこそ油断、過信が生じる</p>	<p>【行政側の取り組み】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>（1）高齢者のブレーキ踏み間違い対策として、安全機能が搭載された車の補助金を整備する</li> <li>（2）歩行者、ドライバー双方の視認性を高める標識、信号等を設置する</li> </ol> <p>【高齢者への啓発】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>（1）反射材を着用してもらう</li> <li>（2）運転免許自主返納を推奨する</li> <li>（3）交通安全教室などで俊敏性を測定する機械を持ち込み、加齢による身体機能の衰え、認知機能の低下を自覚してもらう</li> <li>（4）高齢者のお宅を訪問し、運転前に体調確認、行先などの予定を確認。雨の時は運転しないなど伝える。反射材をその場で靴やかバンにつけてもらう。</li> </ol>	<p>【行政側の取り組み】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>（1）補助金のための予算がつかない。補助金はあるが中古車等条件がある。</li> <li>（2）通学する児童に向けた標識はあっても、高齢者目線の標識がない。横断歩道を渡らない人がある。</li> </ol> <p>【高齢者への啓発】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>（1）反射材を配布しても家にしまいい込んで着用してもらえない。</li> <li>（2）過疎地や公共交通の不便な土地など、車が必要な地域では免許返納を推奨しにくい。</li> <li>（3）会合に参加する方はもともと意識が高いが、会合に來ない方（一人暮らし高齢者）がいる</li> <li>（4）世帯数が多く、軒一軒回って啓発することが難しい</li> </ol>

日時: 令和 7 年 12 月 10 日 (水) 10:35~11:45

テーマ: 自転車の安全利用について

講義内容: 自転車の事故の現状、通行ルール等

講師: (一財) 日本交通安全教育普及協会 普及事業部長  
彦坂 誠



### 交通事故件数と自転車関連事故件数の推移

10 年間の推移を見ると、交通事故件数は半減。ただし、自転車の関与率は上昇している。

### 自転車の交通ルール改正の流れ



・昭和 40 年代 自転車の被害事故防止を目的に歩道通行を推奨→自動車との分離→車両意識の希薄化

・2007 年 自転車安全利用五則

⇒自転車の車両意識の回復、交通ルールの周知・啓発

・2022 年 自転車安全利用五則 改訂

・2023 年 道路交通法 一部改正

⇒ヘルメット着用の努力義務化

・2024 年 道路交通法 一部改正

⇒自転車運転中の携帯電話使用など禁止、酒気帯び運転の禁止、モペッドは電動機付自転車に位置付け

・2026 年 道路交通法 一部改正

⇒青切符の導入 (自転車に対する交通反則通告制度)

## 交通反則通告制度（いわゆる青切符）の導入

・現制度は、書類送検等により有罪になると、刑事罰（拘禁刑・罰金刑）を受ける可能性がある（前科による資格はく奪等）。

・青切符は 16 歳以上の自転車運転者の悪質・危険な違反が対象。

刑事手続きによらず、簡易・迅速に反則金という実効性ある責任追及を可能にする。

例)

「自転車通行可」標識のない歩道を通行した場合（状況により異なります）

1. 単に通行しただけ・・・指導警告
2. 徐行せず、歩行者を立ち止まらせた・・・青切符
3. 歩行者と衝突した・・・書類送検

ながらスマホ（悪質・危険な違反）・・・青切符（12,000 円の罰金）

ながらスマホ＋一時停止無視（悪質・危険な違反、違反で周囲に迷惑・危険）・・・赤切符など

## 自転車の安全利用促進に向けた効果的な広報啓発手法

なぜ交通ルールは守られないのか→知らない、関心がない、自分に関係ない→自分ごと化→関係がある、大切であることを認識させる広報が必要である。

警察庁での自転車の安全利用促進に向けた効果的な広報啓発手法に関する調査事業

- ・自転車の利用頻度・・・ほとんど毎日が最も多い結果
- ・自転車事故の危険性認識・・・関心ありは半数以上
- ・ルールの認知状況・・・ながらスマホの運転禁止はおよそ 85%が認知
- ・歩道通行の際は車道寄りを徐行・・・70%が認知
- ・横断歩道の押し歩き・・・47.8%が認知

⇒ルールは知っていても違反している理由として、取り締まりをしていない、みつからないからが一番高い割合となっている。

広報啓発する際にはターゲットごとの特徴を把握し、方向性を定める必要あり。

例) 10・20 歳代は自転車のルールは認識しているが、経験が少なく、事故を身近に感じていない。

動画・アニメーション・SNS を活用した広報啓発も期待できる。

## 自転車安全利用五則

1. 車道が原則、左側を通行 歩道は例外、歩行者を優先
2. 交差点で信号と一時停止を守って、安全確認
3. 夜間はライトを点灯
4. 飲酒運転は禁止

## 5. ヘルメットを着用

上記五則を啓発していくために、講習会では、地元の写真を活用して、矢印を入れることで理解が深まる。

### **今後の自転車交通安全教育**

警察庁「自転車の交通安全教育の充実化に向けた官民連携協議会」において、「技能」「知識(交通ルール)」「行動・態度(危険予測・回避行動/交通社会の一員としての態度)」の3分野に分け、7つのライフステージに分けて教育内容を整理。

幼少期から積み重ねるようにして、自転車の交通安全教育を実施していくことになる。

- ①未就学児(～6歳)
- ②小学1～3年生(7～9歳)
- ③小学4～6年生(10～12歳)
- ④中学生(13～15歳)
- ⑤高校生(16～18歳)
- ⑥成人(19～64歳)
- ⑦高齢者(65歳以上)